

# 日蓮教學中に交錯せる 中古天台の思想及び様相

淺井要麟

## 目次

### 一、日蓮聖人の天台教學史觀

- (1) 天台妙樂傳教に與同さるゝ立場
- (2) 慈覺智證以後の台密否認の立場
- (3) 中古天台の否認は理在絶言

### 二、宗學上に交流する中古天台思想の一瞥

- (1) 三箇大事
  - (イ) 日滿抄 (ロ) 法華本門弘經抄 (ハ) 眞流正傳抄
- (2) 佛身觀
  - (イ) 天台一家の佛身觀

### 一、日蓮聖人の天台教學史觀

- (1) 天台・妙樂・傳教に與同さるゝ立場

中古天台と日蓮教學との關係を明かにする爲めには、先づその前提として、一般天台教學に對する聖人の態度を一

A 原始天台の壽量顯本論

B 慈覺智證等日本上古天台の顯本論

C 中古天台の顯本論

(ロ) 綱要導師等の壽量顯本論

(3) 吾宗諸家の中古天台模倣

(4) 中古天台教學交錯の經路

三、御遺文中に交錯せる中古天台の思想及び形態

以上

瞥する必要があらうと思ふ。そこで順序として先づ天台大師であるが、大師の教學は、六祖荆溪の解説に従へば、「法華經を宗骨とし、大論等の大乘教論の内容を以て補裝した教義である」が、吾が聖人は大師を以て純正法華經王主義者と目されて居る。これを祖述した章安大師は勿論、六祖荆溪もまた述べて作らず、大体祖述の範圍を出でない。勿論三論華嚴等に依る外的刺激もあつたので、若干の擴充もあり發展もあつたが、後の趙宋天台に見るが如き、法華經の埒外に出たものではない。

宋代に至つて所謂山家山外の論争を生じ、眞妄觀境について論難應酬に蘭菊の美を競ふたが、その後支那天台には二つの傾向を生じた。その一は天台教學の精研を期するの結果、専ら三大部の註釋に主力を注いだ所謂訓詁派であつてその餘流は遠く日本に流れ、近代の學匠たる惠澄大實兩師等に及んで居る。他の一派は天台の論疏中から種々の論題を求めて、これが徹底的究明を計らんとしたもので、日本天台に於ける論議の如きもその亞流である。論議派の意圖する所は、他宗の義學をも包容して、これを同化せんとしたのであるが、その結果或は禪に黨するもの、或は念佛に走るものなどを生ずるに至つた。かくて支那天台は清朝に至り、藕益智旭の出づるに及んで、老儒の思想さへ採用するに至つたのである。

而して吾が聖人は天台・妙樂を以て正統天台とし、妙樂門下の道邃・行滿の兩師から、教觀二門を傳法されたといふ傳教大師までを相承の師として仰がれたが、その後支那で趙宋時代に入つて展開された山家山外の論争や、四明以後に分流した多くの學派等に就ては餘り關心を持たれなかつたやうである。

日本天台の祖たる傳教大師は、傳説に依れば入唐して六祖荆溪門下の行滿から一家の法門を受け、同門の道邃から一心三觀を受けたといはれ、二師別傳を傳へて居るが、この説に就ては今日専門學者の間に議論があつて、これをそ

のまゝ首肯することは出来ない。しかし傳教大師が正統天台の道邃・行滿から傳法されたといふ事實に就ては異論はなからうと思ふ。

傳教大師の傳法内容に就ては、最近も禪の相傳に關して論議が行はれたほどで、相當異論がある。止觀業遮那業の學生を同數にされた点から、天台一家では傳教大師は圓密齊等であつたといふ見解である。然るに吾が聖人は、大師の圓密觀について、飽くまで法華至上と見做し、「眞言宗の宗の名字をば削らせ給ひて、天台宗の止觀眞言等とかゝせ給ふ」といはれて居るのである。

また大師が圓頓大戒壇の建立を畢生の願業とせられた事實に徴しても、大師の意圖が單なる法華一元の佛教の傳弘に非ずして、圓密戒を打つて一丸とした統合的一大圓宗の建立にあつたことを首肯せざるを得ないのである。従つて同じ法華經を傳弘されても、天台大師に在つては一元的であつたものが、傳教大師に至つては多元的となつて居る。然し吾が聖人は、兩大師とも法華中心といふ重点に變りはないものと見做し、兩大師を奉じて正統天台の祖として景仰されたのである。

且つ傳教大師が鎮護國家を強調された点に、立正安國を理想とされた聖人の共鳴があつたらうとも考へられる。すなはち天台大師に在つては、一念三千の哲理は、個人的成佛の直道として採用されたのであつたが、傳教大師に至つては、嘗に成佛法たるに止まらず、鎮護國家の大法として、法華經中心の一大圓宗を建立せられた。そこに聖人の私淑と憧憬とがあつたのであらう。

かくて聖人は天台・妙樂・傳教の諸師を正統天台の師と仰ぎ、支那天台の鼻祖天台大師と、日本天台の祖たる傳教大師とを相承の師と仰がれたのである。聖人がみづから天台沙門と名乗り、根本大師門人といはれたのは、以上の立

場に於てである。

もつとも佐渡以後に於ける聖人がみづから「智解は天台傳教が千萬分が一分も及ぶことなけれども、慈悲すぐれたることは畏れをも懐きぬべし」といつて、その獨自的立場を標榜し、また「像法、中、末、觀音樂王示現、南岳天台等、出現、……百界千如一念三千盡ヒリ其義、但テ論、理具、事行、南無〇經、五字並ニ本門、本尊未ニ廣、行レ之ヲ」と末法出現の自己の立場を明かにされたことは、當然であつて、要するに天台傳教の法華經も、所詮末法に入つては無益なりといふのが、聖人の兩大師觀の結論である。

しかしながら、兩大師を止揚された態度は、慈覺智證以下の台密を否認された、それと同一視すべきではない。否寧ろ聖人はその初期に於て覺證以下の台密を嫌忌して、天台の教風を天台傳教兩大師の古に復せと力説された肅清論者であり、復古主義者であつたのである。

## (2) 慈覺智證以後の台密否認の立場

傳教大師の佛敎觀について、法華至上と認められたる聖人は「叡山第一の座主義眞和尚・第二の座主圓澄大師までは此義相違なし」と評して、正統天台の繼紹者を以て許されて居る。

然るに第三代の座主慈覺に至つては、法華眞言の理同を認むるに至つた。すなはち一行阿闍梨の大日經義釋に、「法華經壽量品の佛と、金剛頂經の毘盧遮那佛とを論じて、兩經の所詮各顯す所あるを以て偏執すべからず」と、二佛の等同を説くに示唆されて、慈覺は法華眞言の理同を認めたのである。かくて慈覺は法華眞言の理密を同格に認めたるのみならず、更に眞言の事理俱密を主張するに至つて、ひそかに眞言の優越を認めたも同然で、この点吾が聖人が台密の先驅者として指彈さるゝ所以である。

更に智證大師に至つては、その著「顯密二宗本地三身釋」この書恐らく中古天台の書に法華の無作三身を以て大日の三身と同一視して、全く殊異なしと論ずるのみならず、大日經旨歸・講演法華義等には、法華大日の二經の勝劣を論じて、顯劣密勝の義を主張して居る。蓋し慈覺の台密思想を百尺竿頭一步前進したものである。

慈覺の弟子安然是、日蓮聖人も「叡山第一の古德」といはれた程の偉大なる存在であつたが、みづから胎藏界の法を受けて、その著教時間答に於ては、法華眞言の理同を説き、また菩提心義抄に於ては、二經の事異を主張して居る。かくて安然是は台密の大成者といはれるのであるが、吾が聖人はその見解を異にせられ、台密の責任はこれを先驅者たる慈覺に課し、安然には別に彼が禪を尊重した責任を問はれて居るのである。すなはち安然是は教時評論に九宗の勝劣を立て、「初めに眞言宗、次に佛心宗、次に法華宗」と法華を第三位に置き、佛心宗すなはち禪を法華以上に位置づけたものであつて、法華經至上の叡山佛教に對する第二の冒瀆として糺彈さるゝのである。

降つて慈慧門下に多くの英才を出し、多士濟々の感觀を呈したが、就中慧心・檀那の兩師は群を抜いて秀でた學匠であつた。その慧心僧都が、從來圓密戒を綜合した叡山佛教中、圓に附隨せる念佛を獨立せしめて、末法相應の行門と稱し、こゝに一新紀元を劃するに至つた。その著往生要集は念佛法門を鼓吹したものであつて、その序文に「夫往生極樂之教行、濁世末代之目足也道俗貴賤誰カ不レ歸セ者ヲ、但顯密ノ教法其文非レ一ニ事理ノ業因ノ其行惟レ多シ。利智精進之人ハ未タ爲ツ難シト。如キ予ガ頑魯之者豈敢テシヤ矣」とある如く、法華經も諸經も一括してこれを抛擲し、念佛の一行こそ末法の要行として強調したのである。

かくて寂山佛教は慈覺に依つて先づ眞言に墮し、安然に依つて禪に屈し、慧心に依つて念佛に走つて、所謂權實雜亂となつてしまつた。吾が聖人が以上の三人を撰時抄に「法華經傳教大師の師子の身の三虫なり」といはれたのはこ

の爲めである。かの寶地房證眞が、當時の叡山佛教に懽らずして「遠ク師トシ大聖世尊ヲ近ク師トシ天台・荊溪ヲ其餘者不レ足レ用レ之ヲ」と道破せると、一脈相通するものがある。

證眞は源平時代、東塔の花王院に在つた學僧で、三大部私記の著者として著聞する所である。夙に慧檀兩流を學びこれを止揚して第三の地歩を占めたといはれるが、要するに兩派の教風に懽らずして、天台・妙樂の古に復れと主張した肅正論者であつて、この点吾が聖人の佐前に於ける天台への復古主義と、その揆を一にするものがある。

### (3) 中古天台の否認は理在絶言

中古天台の範圍に就ては、未だ一定の定説もないが、大体この方面の専門家の意見を參酌して、慧檀兩流の末流で平安末期の院政時代から元祿享保ころまでの呼稱と考へたい。しかしこゝでは直接聖人と關係のあつた時代に限定して解説する。

かの慧心檀那を中心として發達した台密的本覺思想は、やがて文献を離れて奔放不羈な獨斷的解釋を生ぜしめた。これには院政時代に於ける國家權力の衰微に乗じて、勢を張つた僧侶の墮落や、忠實な學問の衰へたことも一因をなしたのであらうが、自由にして奔放不羈な主觀的學風の勃興した結果は、互に異説を立て、自家の祕傳と稱し、これを門外に示さざる風習を馴致するに至つた。この傾向が慧心流に於ては三重七科の法門を中心に、所謂口傳法門となつて現はれ、口決相承に非ればこれを傳へず「錦の袋に入れて頸に懸け、箱の底に埋めて高直に賣る」といはれ、果ては「博千金莫傳之」とさへ稱するに至つた。あたらし一心三觀の法門もこゝに至つて商品化した觀がある。他方檀那流に在つては灌頂玄旨の血脈と稱し、一種の祕密灌頂式に依つて、他の密灌戒灌に對して自門の特色を保つと共に、その流域の擴張を謀つた。所謂玄旨歸命壇がそれである。

かくの如く主觀的解釋や祕密相傳を尙ぶに至つた結果、その教義的内容は非常に獨善的となり、雜樣的となつてしまつた。口傳法門の筆述された最古の文献としては、圓多羅義集であらうといはれるが、その圓多羅義集は古來智證大師の作と稱せらるゝも、實は智證の授決集に擬して後人の偽作したものといはれる。たゞ的確にその時代及び作者を推定し得ざるは遺憾である。その内容は天台大綱決以下五十餘科の法門を掲げて、これを釋するに偽經偽論を列擧して「頓漸圓の三教は法報應の三身と空假中と一心三觀と三觀一心とに名く」といふが如き、牽強附會な臆説を逞うして居るのである。

また慧心流口傳法門を、稍々整理した形態として考へらるゝ修禪寺決にしても、それが從來の所傳の如く傳教大師の作でないことは今日學界の定説であつて、中古天台口傳法門の文献化したものといふことに異論はない。その修禪寺決の内容を見るに、圓密合談は勿論、往生思想・理觀思想・唱題思想等の混交した雜亂佛教である。

その他中古天台を代表すべき枕雙紙・本無生死論・五部血脈・牛頭決等は、何れも口傳法門の文献化したものであるが、その法義内容は雜亂佛教の數に漏れない。法華經至上主義の立場に立つて、慈覺智證以後の權實雜亂を極力指彈せられた聖人が、かゝる中古天台の雜亂佛教を否認せらるゝことは論を俟たざる所である。聖人は常に「修多羅と合せば録して之を用ひよ。文無く義無きは信受すべからず」といつて文献主義を主張し「佛説に依憑して、口傳を信ずること莫れ」と口傳主義の危険を誡められて居たのである。

## 二、宗學上に交流する中古天台思想の一瞥

覺證以後の叡山佛教を目して、權實雜亂と貶し、ひたすらに天台大師の法華經王主義の古に復れと叫ばれた聖人が

覺證よりも甚だしき雜亂教學たる中古天台を容認さるゝ謂はれなきことは、前項に略述した如くである。然るに古今の宗學に於ける種々の部面に亘つて、中古天台の影響または輸入と覺しきものが少くない。それ等のすべてを列挙することは今の目的でないから、試みに三箇の大事と佛身觀に關する二三の文献を擧げて置く。

### (1) 三箇の大事

(イ) 日滿抄 傳に云く、佐渡阿闍梨日滿著

問云、於此宗ニ三箇ノ大事ト云何。答、是義未ト相傳セ、但天台一家之三箇ノ大事ト者四箇大事ノ中ノ法華深義ト云フ内ヨリ略傳三箇ノ大事ヲ開出ス。圓教ノ三身、常寂光土義、蓮華因果是也。先此旨ヲ能ク相傳、其上ニ可ト得ト意事也。當家ノ三箇ノ大事、者御書ニ云ク、本門ノ本尊ト與ニ四菩薩ト戒壇ト南無〇經ニ五字也。云云此三大事歟。敢テ難シ及ヒ短慮ニ。興門集四〇四頁

以上は中古天台を一貫して中心教學となつた三重七科口傳法門の中、廣傳四箇の大事の下、法華深義の下に分開された略傳三箇の名目を掲げて、その趣旨を相傳せよと説き、かへつて吾宗の三箇の大事については「短慮に及び難し」と匙を投げた態であつて、その間におのづから中古天台禮讚の片影が現はれてゐるのである。

さて略傳三箇の第一、圓教の三身とは、法華經本迹の教相を超越した本迹未分の觀心（すなはち一大圓教）の上に立つ所の無作三身の佛である。従つてこの佛は始めて修顯した三身ではなく、本來法爾として三身圓滿の覺体であつて、これを圓教の三身とも無作三身ともいふ。すなはち自然本覺の佛である。

第二の常寂光土義に於て、理・事の寂光土を説く。すなはち理の寂光土とは、一念未だ生ぜず、萬法未だ分れず、身土依正の別もない本有常寂の土である。事の寂光とは森羅三千の事相宛然として、身土依正の姿歷然たる當相をい



ふのである。而して諸宗が理の寂光土を説くに對して、慧心流に於ては俗諦常住を談する立場から、事の寂光土を主張するのである。

第三に蓮華因果とは、法界の依正二報の上に、因果俱時に圓滿することを顯す法門である。無始已來三千の諸法宛然たる所に、本有の因果を説くのであつて、これを蓮華因果といふのである。すなはち當体蓮華である。蓮華は花果同時なる故に、三千の依正宛然たる當体に本有の因果ありと説くに譬へたのである。

要するに圓教の三身は能居の三身を説き、寂光土義は所居の依報を談じ、蓮華因果は依正二報の上に本有の因果を顯す法門である。而してかゝる自然本覺的台密思想が、無條件に吾が宗學に輸入せられたことは、吾が宗學の特異性を疑はしむるものである。聖人の立てられたる正確なる宗學指標が、果してそのやうな空疎なものであらうか。

(ロ) 法華本門弘經抄 精進房日隆著

日存聖人御口傳に云く、彼の天台宗七箇の大事とは、傳法要偈の大事、此れは傳教大師の本相承なり。略傳三箇の大事とは、慈覺大師異朝將來の相承なり。都合七箇なり。四箇の大事の中の法華深義より略傳三箇の大事は出でたり。所謂三箇とは圓教の三身、常寂光土の義、蓮華の因果なり。法華の深義とは、法華玄義と云ふことなり。玄義とは五重玄、五重玄とは總別也。別体の宗用を以て總名に攝す。總名の妙法蓮華經とは本門にこれあり。本門の妙○經に圓教の三身、常寂光土義、蓮華因果の三箇の大事を具足せり。此の三箇の大事とは當宗三箇の祕法なり。所以に本門の本尊とは圓教の三身、本門の戒壇は常寂光土、事行の首題は蓮華因果と相配すれば、次での如く義理亦分明なり。再釋に及ばず。云(日隆上人全集十一卷五頁)

と明かに中古天台に於ける略傳三箇の法門を採り上げて、本門の三大祕法を解説されて居る。こゝに至つて一部宗外

の學者から、本門の三祕は、中古天台に於ける三箇大事の脱化なりといはれても、何等辨疏の辭はないわけである。

(ハ) 眞流 正傳鈔 常不輕院日眞著

傳教大師略傳三箇ノ祕法ト云フ事道遂修禪寺決ト云フ物ニ書ケリ。是ト則チ七百餘科ノ相承ノ中ヲ取テ簡要ヲ爲シ三箇ノ祕法ト。夫トハ者圓教ノ三身、蓮華因果、常寂光土義也。此ノ三ヲ蓮師替テ名目ト云フ本門三大祕法ト事ヲ錄外一通抄ニ有テ製作ト。此中ニ云フガ圓教三身ト當家ノ教主也。是ヲ當宗ニ名ヲ本門ノ本尊ト、扱テ蓮華因果トハ者當宗ノ題目ノ一大事也。常寂光土義トハ者本門ノ戒壇院也。(本妙法華宗部第一、二三二頁)

この文には略傳三箇の大事を、吾が聖人がその名を本門の三大祕法と改められたと斷言されて居る。吾が宗旨の三祕にして果して然らば本化別頭の教觀も決して別頭ではあり得ない。權實雜亂の極に達した中古天台の雜亂佛敎を母胎として脱化した本門の三祕なりと斷するに至つて、吾が宗學の特異性もなければ優越性もあり得ない。かくて聖人をして中古天台の一亞流と化せしめて悔ひなきを得るであらうか。

(2) 佛身觀

(イ) 天台一家の佛身論

宗學上に散見する中古天台の佛身觀を検討する前提として、先づ天台一家の壽量顯本論を一瞥し、特に中古天台に於ける佛身觀そのものを正確に認識し、これを把握しなければならぬ。

(a) 原始天台の壽量顯本論

天台大師以前の所謂古師の佛身觀は概ね法身顯本論であつた。また光宅の如きは壽量品の劈頭に「如來祕密神通之力」とある文に依つて、壽量の塵点遠壽を以て、釋尊の神通力に依る延壽と解し、神通延壽なれば終に盡くる期あり

となして、應身無常論を唱へた。

天台大師は古師の法身顯本と、光宅の應身無常論とを止揚して、自ら通明三身別在報身の義を提唱されたのである。すなはち壽量顯本の所詮は、通じては三身常住であり、別しては報身顯本である。佛の智慧が宇宙の眞理を体得する時、その所知見の理を法身といひ、能知見の智慧を報身といふ。而してその佛が赴機益物の爲めに發動する、これを應身といふのである。すなはち最初證得の佛（報身）が宇宙の眞理に冥し、赴機益物に發動（應身）する、そこに三身が具足するから通明三身といふ。而も中間性の報身は上、法身に冥し、下、應身に契ふから、別在報身と説く。これは佛身觀發展史上に於ける天台大師の一大卓見であつて、妙樂大師も、これを繼承して

法身非壽は諸教の常談、但だ未だ曾て久遠遠壽を説かず。（文會二十五卷四十四丁）

と、天台の久遠遠壽を大師の獨創として誇耀されて居る。まことに法身非壽は冷かなる理体法身の常住に過ぎない。これを人格的に久遠實成の報身佛と見る所に、法華經の卓異性があり、天台大師の獨創があるのである。また妙樂大師は光宅の應身無常に對しても

諸釋皆壽量を以て無常とせず、光宅乃ち壽量を以て延壽となす。

と評破されて居る。かくて原始天台に於ては文上塵点を能顯とする報身佛を以て壽量顯本の所詮としたのである。

(b) 慈覺智證等日本上古天台の顯本論

原始天台に於ては、報身顯本を以て一家の獨創として誇耀するに拘らず、日本天台に於ける慈覺智證以後に至りては眞言の影響を受けて、大日本地身の法身と、壽量本佛との融合を説くに至つた。その源は遠く支那の一行阿闍梨に發したものであつて、一行の大日經義釋（續藏第三十六套三三八）には、法華經を以て略説となし、大日如來の説か

れた密經を「妙法蓮華最深祕處」となして、壽量品は畢竟「此宗(眞言)瑜伽之意耳」と説いて居る。すなはち法華本門の報身佛と、大日法身如來との融合論である。この大日經義釋の文に示唆された慈覺大師は、その著金剛頂經疏に於て、

毘盧遮那佛、雖レ云フト不久現證ト而モ成佛已來甚大久遠、所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>説<sub>レ</sub>經ト劫數<sub>レ</sub>者於<sub>レ</sub>經ニ各有<sub>二</sub>傍正<sub>一</sub>義<sub>レ</sub>故<sub>二</sub>法華<sub>一</sub>正<sub>レ</sub>破<sub>ニ</sub>近成<sub>レ</sub>執<sub>テ</sub>故<sub>ニ</sub>廣<sub>ク</sub>説<sub>ク</sub>劫事<sub>一</sub>。今此經<sub>一</sub>正<sub>レ</sub>顯<sub>ニ</sub>頓成之相<sub>一</sub>故<sub>ニ</sub>廣<sub>ク</sub>演<sub>ニ</sub>此現證相<sub>一</sub>略<sub>ク</sub>説<sub>ク</sub>久成<sub>レ</sub>事<sub>一</sub>雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>傍正<sub>一</sub>二佛不<sub>レ</sub>異<sub>一</sub>。  
(三卷六丁)

と論じて、金剛頂經の不久現證と、法華經の久遠實成とを習合して、金剛頂經は顯教の歴劫を破して、密教の頓證の相を顯すが爲めに不久現證といひ、法華は近成の執を破するを正意とするが故に久遠實成と説く。互に傍正の異りこそあれ、その歸趣は一であると主張したのである。

次に古來智證の著と傳ふる顯密二宗本地三身釋が、果して智證の作なりや否やは別に檢討の必要がある。寧ろこの書は中古天台の分野に入るべき思想内容と思はれるが、同書には

經<sub>ニ</sub>云<sub>ク</sub>我實成佛已來<sub>文</sub>天台大師<sub>ノ</sub>釋<sub>ニ</sub>云<sub>ク</sub>能成<sub>ハ</sub>即報身<sub>、</sub>所成<sub>ハ</sub>即法身<sub>、</sub>法報合<sub>スル</sub>故<sub>ニ</sub>能<sub>ク</sub>益<sub>ス</sub>物<sub>一</sub>。故<sub>ニ</sub>能<sub>ク</sub>三世<sub>ニ</sub>利<sub>ニ</sub>益<sub>ス</sub>衆生<sub>一</sub>。上<sub>レ</sub>能成即報身者如來<sub>ノ</sub>知見也。所成即法身<sub>一</sub>者所知見三界之相也。准<sub>ニ</sub>此文<sub>一</sub>釋迦如來<sub>ノ</sub>久遠實成之時<sub>、</sub>三界<sub>ノ</sub>衆生悉<sub>ク</sub>成<sub>ニ</sub>本<sub>レ</sub>地<sub>ノ</sub>法身<sub>一</sub>也。釋迦如來<sub>ハ</sub>以<sub>テ</sub>如實<sub>ノ</sub>知見<sub>ヲ</sub>令<sub>テ</sub>下<sub>ニ</sub>三<sub>レ</sub>界<sub>ノ</sub>衆生<sub>ヲ</sub>成<sub>ニ</sub>本<sub>レ</sub>地<sub>ノ</sub>法身<sub>一</sub>者<sub>ハ</sub>是妙中<sub>ノ</sub>甚妙<sub>、</sub>極中<sub>ノ</sub>極説也。  
(日本大藏經天台宗密教章疏四七三頁)

と論じて居る。この書に釋尊の本地開顯を能顯とし、衆生の本地開顯を所顯とするあたり、かの二帖抄見聞(天全二七五頁、同二六九頁)及び文句略大綱私見聞(佛全一五七頁)等と同致であつて、寧ろ中古天台に屬すべき文献であらう

が、別に智證の阿字祕釋には、

壽量常住へ久修得テ正ク此妙法へ最深祕密ノ大日如來常心地ナリ。今爲ニ大會ノ自ラ開演ス、故題ニ妙法蓮華經ト。

(日藏天台宗密教章疏一卷四六八頁)

と、壽量品の佛を能證、大日如來を所證として、圓密一致を説き、隱約の間に密勝顯劣の思想を露顯せしめて居る。

かくて支那天台に在つては、壽量文上の塵点に即して報身常住を説きたるに對して、今や覺證兩師に依つて密經と結合の結果、久遠實成の釋尊は能證の報身佛、不久現證の大日本地身は所證の法身佛と論じて、おのづから密勝顯劣の思想に墮して居るのである。

### (c) 中古天台の顯本論

中古天台の最大な特色は、教相を逸脱した極端な觀心主義であるが、佛身觀もまたその線に沿つて生長してゐる。

古來慧心僧都の著といはれる枕双紙は、今日に於ては俊範から靜明のころの作と推定されてゐるが、同書に

佛本門壽量ノ説ク久遠成道ト皆假ノ施説也。其實ニハ如來藏ノ理ニ本自リ不レ論セ成不成ヲ無シ始中終ノ差別一何ゾ論ゼン久遠ト與  
 ニ今日一雖レ然レ爲レ利益ニ衆生ニ爲レ令レ起ニ信心ヲ説ク五百塵点ト也。若シ爲レニ他機ノ不レ同カ。相ニ應セバ彼ニ者可レ説ク五  
 百六百乃至百千萬ト皆是レ假説也。(惠心全集一卷一三三丁)

と五百塵点是假説なりと斷じて居る。また等海口傳には

靜明ノ御義ニ云ク、世間ノ學匠ハ五百塵点最初實成ノ事成ノ時分ヲ云ニ本實成一云フ顯本トモ也。其モ顯本ノ其一也。舉ニ事成ノ本  
 一ノ事爲レ顯シガ無作三身ノ本一方便也。仍テ先ツ可レ定ム本實成ノ相一也。當流ニハ本實成ト者云フト無始無終無作ノ三身ノ顯本一習  
 也。(天台集全書五〇四)

と論じて、釋尊の久遠實成を以て文上能顯の方便となし、釋尊の無始無終本覺無作の三身を顯すのが文底所顯の實義であるといふのである。これは明かに壽量一品の上で文上能顯と文底所顯とを論するのであつて、かの覺證等の台密に於て、法華經と密經とを對立せしめて能所を論じ、法華經は能詮の報身、事顯本の釋尊なりといひ、密經は所詮の法身、理顯本の大日本地身なりと説くとは、その綱格を異にするものである。彼は二經對論の上の能所であり、これは法華一經の上の能所であり、尅實していへば壽量一品の上の能所である。

かくて中古天台に於ては壽量顯本の佛は無始無終の本覺三身如來と説くのであるが、その佛の法体内容に於ては、大日本地身と何等異なる所もない自然本覺の素法身に外ならぬ。この点密經の影響でなくて何であらう。

かくて顯本の事理について、文句略大綱私見聞には、

先事顯本ト、經文ニ塵數ノ五百塵点相ヲ説テ破シ迹ノ是ヲ破迹顯本ト云フ也。理顯本ト云ヘ我等生死流轉ノ無始ノ色心ヲ本覺無作ノ妙境妙智ト顯ス是ヲ開迹顯本ト云也。(佛敎全書一五七頁)

と事顯本の落居は理顯本であると論じて居る。且つ尊舜の玄義見聞には、

悲心流ニ理成ハ勝シ事成ハ劣ト成シ玉フ也。塵点ノ當初ノ事成佛ト者爲メ破シ迹化ノ近情ヲ譬ヲ借ニ塵点ニ故ニ彼ハ能顯ノ方便也。此外ニ所顯ノ佛体可有之也。其佛ト云ヘ住本顯本内證無作本覺ノ如來也。(六卷十四丁)

と論じて事成は能顯の方便、理成は所顯の實事であつて、本覺無作の佛であるといつて居る。その他等海口傳(天全五〇二頁)等にも心賀の御義と稱して理顯本正意が説かれて居る。

かくの如く事顯本の報身を方便とし、理顯本の法身すなはち本覺無作の佛を眞實身とする所にも、法華經本迹の教相を離れて、専ら觀心を最要とする觀心主義的傾向が見られるのである。等海口傳に、

迹門、應佛ノ三身也。本門、報佛ノ三身也。本迹不二ノ觀心、法中論三ノ三身也。(天台宗全書四九五頁)

とある如きは、これを裏書きするものである。かくて文上塵点實修實證の報身佛を有始として輕視し、文底の無始無終本覺無作の自然覺を重んじた結果、それは獨り果上の佛のみには限らない。在迷の凡夫もまた同じ本覺無作の三身如來であるといふ思想にまで展開した。この間の關係を二帖抄見聞に、

今ノ顯本ノ本意ハ十界ノ衆生悉ク無作本覺ノ如來ニシテ一切衆生ノ生住異滅ノ四相ヲ本來常住ト見ユケタ成道ト云フ也。(天台宗全書二七五頁)

所詮顯本ト言フハ何事ト言フニ顯ニ衆生成佛ノ本佛ヲ名ナリ。其成佛ト者顯ニ自受用本覺ノ智体ヲ名ナリ。(同二六九頁)

と論じて、壽量顯本ノ本意は衆生本有の無作三身を顯すにありといひ、文句略大綱私見聞にも、

今ノ然我實成佛ノ我ト、自我得佛來ノ我ヲ一具ニ習フ時、凡ソ於レ我ニ實我假我アリ、凡夫ノ我ヲ實我ト言ヒ佛界ノ我ヲ假我ト言フ也。

今ノ我ノ釋尊ノ顯本ヲ說ケ故ニ假我也。此ノ我ヲ十界ノ我ト習フ也……此時ハ釋尊一佛ノ顯本ヲ十界同時ノ顯本ト可レ得レ意也。(佛教全書一五七頁)

と壽量品に於ける釋尊の顯本を假説として、衆生の顯本を實義とするに至つた。而して釋尊自らの第一人稱である「我實成佛」「自我得佛來」の私の字に「大」の一字を冠して、これを十方法界の「大我」と解釋したのである。かの御義口傳に「我とは法界の衆生なり」と解釋せる如きは、實にこの中古天台の思想に基くものである。

かくの如き觀心主義の解釋は、啻に十界の衆生の顯本に止らず、更に進んで森羅三千の情非情の顯本にまで展開した。すなはち文句略大綱私見聞に蓮實房の口傳として「五百塵点迹佛ノ壽命、森羅萬象ノ本佛ノ壽命ト口決シ玉ヘリ」と云ひ、これと同じ口傳が等海口傳(天全五三八頁)にも見えて居る。かくて法身理顯本の思想は釋尊の顯本より十界の

衆生の顯本となり、再轉して非情の一草一木の顯本にまで展開したのである。草木成佛の思想はこの思想の基礎に立つものである。

かゝる觀心主義の傾向は、遂に十重顯本は教相の所談にして實義に非すと下し、十重顯本の上に別に觀心顯本を立て、これを最後究竟の顯本となすに至つた。すなはち二帖抄見聞に、

十重顯本ノ中ニ不<sub>レ</sub>盡顯本ノ實義<sub>ヲ</sub>此上ニ立<sub>テ</sub>觀心顯本<sub>ヲ</sub>顯<sub>ス</sub>一念三千ノ本理成道<sub>ヲ</sub>也。此等ノ義門他流ニ不<sub>レ</sub>知<sub>ル</sub>事也。(天全二七〇頁)

と、その獨創を誇り、

十重顯本ノ中ノ住本顯本ト言<sub>フ</sub>實ニ用ノ重也。破廢開會ノ上ニ住<sub>ス</sub>本覺ノ内證ニ故ニ尙是<sub>レ</sub>外用ノ重也。……迷悟<sub>モ</sub>不<sub>レ</sub>分<sub>テ</sub>機法<sub>モ</sub>不<sub>レ</sub>起<sub>ラ</sub>三千有<sub>リ</sub>任<sub>ラ</sub>本地無作ノ實體<sub>ヲ</sub>實ニ不<sub>レ</sub>説<sub>キ</sub>壽量品<sub>ニ</sub>也。(天全二八三頁)

と論じて未だ迷悟も分たず機法も起らざる本有の三千の有りのまゝなる本地無作の實體を顯すのが實義であるが、壽量品にはその實義が説かれてない、それゆゑ壽量品の十重顯本の上に更に觀心顯本を立て、眞實の顯本とするのである。

かくの如く全く教相の軌範を脱して、飽くまで奔放不羈な自由な解釋は、中古天台に於ける獨創であつて、教觀相資の教學に於ては絶えて見ざる所である。

#### (ロ) 綱要導師等の壽量顯本論

導師は「三世顯本最初爲本章」に於て壽量顯本を論ずるに、當體義鈔・總勘文抄・灌頂抄等を擧げて、壽量所顯の佛体を無始本覺毘盧一本と論じられて居る。果して然らばそれは自然本覺の佛であつて實修實證の佛ではない。故に



刪者はこれを指摘して、

所<sub>レ</sub>明<sub>レ</sub>、即是無作三身ノ全象、本來ノ自覺佛<sub>ニ</sub>未<sub>レ</sub>涉<sub>ニ</sub>修證<sub>ニ</sub>者也。(刪略一三三頁)

と評破されて居る。優陀那和上もまた正義にこの点を論じて、

此一簡ノ法門是<sub>レ</sub>台家釋文ノ宗要<sub>ニ</sub>而非<sub>ニ</sub>當家釋義ノ所用<sub>ニ</sub>何<sub>ト</sub>ナレ<sub>ル</sub>者當家ノ判<sub>ニ</sub>壽量ノ文義<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>塵点ノ初成<sub>ヲ</sub>爲<sub>シ</sub>文上能顯<sub>ト</sub>以<sub>テ</sub>無始本覺<sub>ヲ</sub>爲<sub>シ</sub>文底所顯<sub>ト</sub>故<sub>ニ</sub>三世顯本皆無始本覺毘盧一本<sub>ヲ</sub>爲<sub>シ</sub>所顯ノ本地<sub>ト</sub>故也。(刪略正義會本一三四頁)

と評破し「刪者の説辭理痛快、頗得<sub>ニ</sub>顯本ノ本意<sub>ト</sub>」と刪者の説を支持されてゐる。まことに本覺毘盧一本を所顯の本地となすが如きは、尊舜の玄義見聞(六卷十四丁)その他前記中古天台の諸書に明かなる如く、全く中古天台の思想そのものである。

また導師は「壽量所顯本覺三身章」に於ても、灌頂抄、總勘文抄、御義口傳等の文獻を擧げて「須らく向來の諸文を以て本覺所顯の旨を思付すべし」といひ、當体無作本覺三身の義を主張し、また「二種本門十條異目」の下には、指<sub>シ</sub>文上<sub>ニ</sub>名<sub>ヲ</sub>隨他<sub>ト</sub>者正<sub>ク</sub>由<sub>テ</sub>爲<sub>レ</sub>破<sub>ニ</sub>迹執<sub>ニ</sub>且<sub>ク</sub>立<sub>テ</sub>遠成<sub>ノ</sub>言<sub>ト</sub>其云<sub>フ</sub>成佛<sub>ト</sub>是順<sub>ニ</sub>夢裏ノ妄情<sub>ニ</sub>之語<sub>ナリ</sub>本覺之家<sub>ニ</sub>都<sub>テ</sub>無<sub>シ</sub>成佛<sub>ノ</sub>言<sub>ト</sub>。(刪略一四七頁)

次ニ隨自本門<sub>ト</sub>者即是<sub>レ</sub>文底無始ノ古佛也。(刪略一四七頁)

と文上隨他、文底隨自等の義を擧げられて居る。而してこの義が前掲の玄義見聞等の中古天台の義と酷似して居るので、流石に導師も簡別に苦み「慧流古義、大に今の意に同じ―刪略一四七頁」と告白されて居る。更に導師は大日經の一切本初と法華經の久遠實成との同異を論じて、

夫<sub>レ</sub>大日經<sub>ニ</sub>說<sub>シ</sub>我一切本初<sub>ト</sub>自<sub>ラ</sub>約<sub>ニ</sub>法身<sub>ニ</sub>諸經ノ常談<sub>ナリ</sub>。未<sub>レ</sub>足<sub>ク</sub>奇<sub>ク</sub>希<sub>ク</sub>今經獨<sub>リ</sub>明<sub>ニ</sub>塵点成佛<sub>ト</sub>此<sub>レ</sub>約<sub>ニ</sub>報應<sub>ニ</sub>衆典<sub>ニ</sub>絶<sub>テ</sub>

無。(刪略一五〇頁)

と法華の報身顯本を誇りつゝ、而も前記の如く中古天台に同じて自ら法身顯本に墮し、「慧心ノ本覺義濫<sub>三</sub>吾門ノ流義<sub>二</sub>」などといはれて居るのである。

### (3) 吾宗諸家の中古天台模倣

更に興師の筆受と傳ふる「教化弘經七箇口決大事」御本尊七箇之相承の如きは、中古天台に於ける「七箇大事」を模倣したるものゝ如く、八品隆師の私新抄第十三卷（宗全三九六）に「教行證三重血脈事」の一項を置いて、吾が宗の三重血脈を説く如きも、中古天台の三重の口傳を模したものであらう。もちろん教行證三重のことは、天台大師が夙にいはれたことで「乘<sub>三</sub>有<sub>三</sub>三種<sub>二</sub>謂<sub>二</sub>教行證<sub>一</sub>—玄會五下八右」とあるのであるが、これを三重の口傳として取扱つたところに、中古天台の特色があり、それを模倣したのが私新抄等である。

また興師の口訣相承と稱する本因妙抄、百六箇相承を初め、三位順師の本因妙口訣等、多くの口傳形態をなすものは、恐らく中古天台の口傳形式に學んだものであらう。

而してその模倣は形態の上のみではなく、思想内容に於ける輸入も前記諸文献の外、御本尊七箇相承に、師云、法界、五大、一身、五大也。一箇、五大、法界、五大也。法界即日蓮、日蓮即法界也<sub>三</sub>。(興尊全集四二頁)

と五大体同の理体論を以て、當位即妙不改無作の即身成佛を説く如きは、眞言密教から輸入した台密思想の再輸入でなくて何であらう。

その他四重興廢の教判、本迹未分の一致論、木有思想、心性本覺思想等一々枚舉に遑ないほどであるが、それ等の考證は且らく措き、宗學上にかくの如く中古天台の教學を輸入するに至つた起因が那邊にあるのであらうか。

## (4) 中古天台教學交錯の經路

中古天台教學が、吾が宗學の中核にまで侵入した經路を明確にする爲めには、多くの考證的研究を要するが、今その一斑を考察するに、聖人滅後昭師門下の日祐、身延三世日進、富士興師門下の三位日順等の諸師を初め、多くの法孫が叡山に登つて權實雜亂の台密の法水を掬した結果でないとも限らない。もつとも前記祐・進・順等の諸師が直ちに台密移入の責任者であるといふのではなく、かゝる時代の情勢から生じた結果ではあるまいかといふのである。

また鎌倉の末期から足利時代へかけて發展した關東天台の昌へるに及んで、宗門の學匠が多くこの方面から法流を傳へた形跡がないではない。例へばかの録外御書編纂の先驅者の一人と目される、京都本覺寺の眞如住師が、尊海門下の祐海の末裔から傳法した柏原慶舜より七科法門の傳授を受けた事實があり、妙覺寺日享師は尊源といふ人から二帖抄の相傳を受けて、これを玉昌院日性に授けた。そして性師が永平五年十月から二帖抄について講述されたものを、會下の日義が記録して「一流相傳私見聞書」と題し、今なほ身延文庫中に現存して居る。同書に二帖抄相傳の系脈について左の如く記して居る。

此相承、尊海、五十八歳、祐海、四十二、貞海、三十、貞濟、三十五、貞舜、(柏原開祖)二十九、慶舜、二十九、日佳、(本覺寺)三十二、日享、(妙覺寺)二十八、尊源ヨリ初テ傳授シキリ、重テ日佳ヨリ四十三、年傳授、仰セ也云云。

更に眼を轉ずると、身延行學朝師の師日出上人は曾ては仙波談林の化主となつた人であり、また朝師自らも少くして仙波に負笈し、後更に叡山に登つて台密を研鑽せられた人である。かの仙波は圓頓房尊海以後關東天台の中心であり、田舎慧心の本山であつた。その仙波に師の日出上人は化主として留錫し、弟子の朝師も後年學徒として留學せられたのであるから、その學風に影響のあるのが寧ろ當然の經路ともいふべきであらう。

且つ朝師の弟子の意師は叡山に於ける朝師と同學たるのみならず、朝師に私淑して師事するに至るまでは金鑽寺豪海門流の榮源の門に在つた人である。また同じ朝師門下の日傳上人にしても、檀那流の出身でありながら二帖抄見聞をもつし、現に身延の寶藏に現存して居る。同書に七科の法門について、

一切法門ノ母也。此七ヶ攝屬ニ非ハ法門ノ不可有也。(上卷十七丁)

と記されて居る。當時の天台一家に於ては、入室の弟子に對して先づ法華經を授け、次に三大部を學ばしめ、然る後この七科の法門を血脈として授けるのが例であつた。即ち七科の法門は天台の三大部に代るべき時代化した教學体系として金科玉條の重きをなし、口訣相傳されたものである。身延の意師が曾て泰藝と稱し、未だ天台の學僧であつた頃に書かれた「一流相傳法門私見聞」が、身延文庫に現存するが、その卷頭に、

仰ニ云、入室ノ弟子ト者初ヨリ弟子ノ事也。先ツ傳ニ受シ法華經ヲ其後三大部ヲ學ヒ明メテ後此ノ血脈ヲ受ケル也。

と記されて居る。以て當時如何にこの書が祕重せられたかを想見し得るのである。

而して吾が宗の學匠が相次で、或は柏原に、或は仙波に、或は金鑽に留錫して、中古天台の中核たる七科法門の相傳を受けられたのみならず、これを禮讚し、淘酔されたかの觀あるは、まことに意外ではあるが、これを吾が宗學上に中古天台教學の竄入せる事實と思ひ合せる時、ほどその由つて來る經路について見當がついたやうにも思はれる。

且つその祕傳相承の形態を生ずるに至つた動機として考へ得ることは、聖人滅後、聖人門下に於ける各派分張時代に於て、互にその流義を誇耀するの結果、これを祕して他門に示さず、天下無雙唯授一人の大法門として祕傳相承の風を生じたもので、一種の獨善的態度を中古天台のそれに倣つたものであらう。

中古天台一流の觀心主義が、吾が日蓮門下に浸潤した當時のこと、龍華の像師門流では、六ヶ條式目なるものを制

定して、

不<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>教道證道之義<sub>ヲ</sub>而於<sub>テ</sub>謂<sub>ニ</sub>觀道之法門<sub>ト</sub>之事<sub>ト</sub>者不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>妙顯寺門徒<sub>ト</sub>。

と單觀無教の觀心主義を戒めて居る。この六ヶ條式目なるものが、果して像師の作なりや否やは別に検討の必要があるとしても、これに依つて龍華門徒が、教觀相資の立場を守つて、妄りに觀道に走るの危険を戒めた當時の宗學界の情勢を看取し得ると同時に、門流割據の情勢が窺はれるのである。

### 三、御遺文中に交錯せる中古天台の思想及びその様相

聖人滅後に發展した宗學上に中古天台の思想及び形態が交錯して居ることは、前項までにほど明かにし得たと思ふが、聖人みづからの御撰述と傳へらるゝ諸篇の中にも、同じ傾向が窺はれるのである。例へば慧心の「法華即身成佛要記」を改訂したと推定すべき十如是抄の如きもあれば、その他中古天台の翻案改訂と見るべき諸篇がないではないそれ等の中には、中古天台、殊に慧心系の口傳形式を文獻化した口傳抄とか口訣形態のものがある。

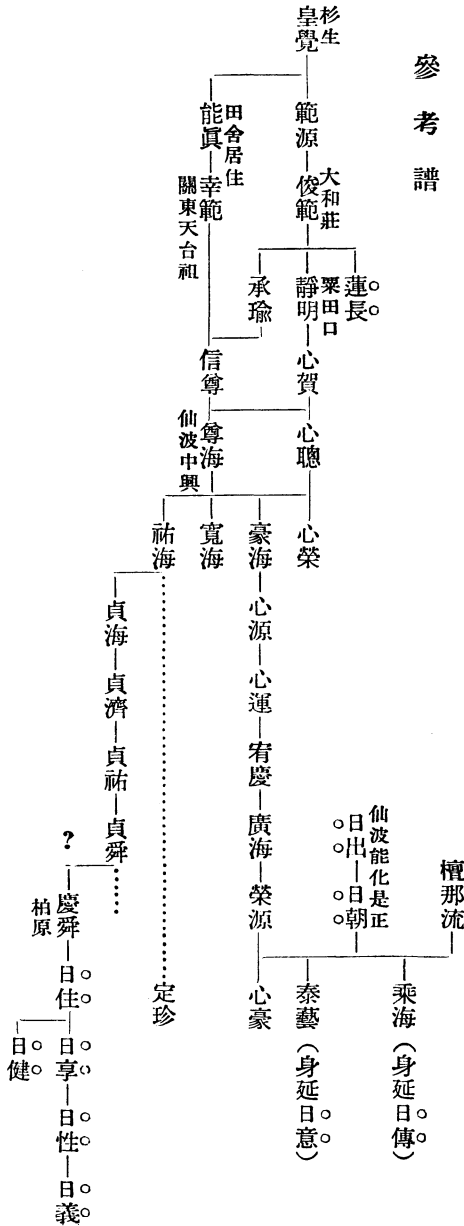
またそれ等の法義内容としては、法身顯本の重に立つ自然本覺の無作三身説、心性の八葉蓮華説、五大融通思想、四重興廢の教判、本有常住の思想、本迹未分思想等、凡そ中古天台特色の法門を採り入れて、吾宗の教學と殆ど識別に苦しましむるものがある。聖人滅後に於て成立し發展した宗學に於てこれあるは、ほど前述の如き歴史的理由に起因したものであらうが、聖人みづからの御撰述と稱する諸篇にこれあるはまことに不審に堪えざる所である。

而してこの点について宗內的に學者の検討が行はれてゐないから、古今自他宗の學者をして、聖人教學の眞髓を把握するに苦しましむるのみならず、かの舜統院眞超をして、中古天台の代表的著作ともいふべき修禪寺決を「恐らくは

日蓮末弟の謀作なるべし」と放言せしめ、また近世三井の敬光や前田慧雲師等をして、聖人の教學は修禪寺決より脱化せるものなりと斷ぜしむるに至つたのである。且つ島地師の如きは聖人の教義は本覺無作の立場であるに拘らず、その行門に於ては、有作の唱題修行を唱導されて居るが、この間の聖人の自己矛盾については、恐らく終生解決し得ざる謎であらうといはれてゐる。

かくの如く古今自他宗に亘つて、聖人教學の特色を把握し認識するに苦ましめた第一の原因は、果して何處にあるか。この点を究明し検討するのは、吾等宗學の研鑽に従事するものに課せられた重要な一課題である。

### 參考 譜



— 一四・一一・一八 —

お断り

一、本稿に於ては、最初日蓮聖人遺文全集中に散見する中古天台の思想及び様相について検討する意圖であつたが、起稿直後、身邊に不幸相ついで續出し、爲めに幾たびか構想亂れ、執筆を廢するの止むなきに立ち至つた。

そのうち編輯の期限に後れ、編者より督促矢の如く、辛うじて序説ともいふべき研究の一部を脱稿したが、所期の本題に入り得ざりしのみならず、考證も足らず、論述も雜駁となつたことはまことに遺憾である。依て止むなく標題を改めて責めを塞いだ次第である。

一、昨年夏、大崎學報誌上に發表した拙稿「慧檀兩流と日蓮聖人の教學」中の一節に關して、山川智應氏から本誌上に於て反對意見の發表があつた。當時山川氏から私信を以て、學界の爲め是非應酬せよとの慫慂もあり、自分としても責任上の必要は感じたが、私の研究に對する部分的な反對意見の發表でもあり、論争形式に依る應酬は欲しないから、適當の時機に於て適當形式を以て私見を發表する旨を答へて置いた。

他面日本天台の研究に従事する林宣正君が、この問題について意見を發表したいとのことであつたから、それには私も同意して置いた。恐らく本誌上あたりで公表する豫定であつたらうが、去る九月俄かに應召して、世田ヶ谷野戰重砲隊に入營し、次で第二陸軍病院に入院して今日に及んで居るので、遂にその意を果し得なかつたわけである。

右は本誌に關係のあつたことでもあるから、餘白を借りて一言お断りして置きたい。